

親苦勞する 子樂する 孫乞食する その先にあるもの

これは昔からある諺です。また、お墓じまいの時によく聞く「子供に迷惑をかけたくない」これはどんな理屈なのか。

厳しい環境に育った人は、その厳しさに押し流される人もいます。逆に覚悟を決めて、苦難に立ち向かう人もいます。そして努力の末に成功する。成功した親のもと、子供たちは恵まれた環境に育ち、その恩恵を当然として育っていきます。親は自分が味わった苦勞を子にさせたくないと思うのが普通の心情です。私もこの恵まれた立場にあったように思います。結果、子は厳しさを体験することができずに大人になっていく。そして、孫世代になるとさらに豊かな環境で育ってゆき、ある時に世間の厳しさにぶつかり、没落してしまう。

人はなるべく苦難に遭いたくない、苦勞せず成果をあげたい、豊かな生活をしたいと願います。しかし苦勞を避けて生きている限り、自分の成長もない。楽な環境にいて苦難に立ち向かう気概を持つのは難しいものです。それを伝えるのが親なのか、子の自覚なのか。

実は成功した人は、苦難が幸福へのスタートだったと言います。究極は、苦難も幸福も形を変えた同じものなのかもしれません。

三内霊園 無縁塔

三内霊園の中央ロータリーから少し奥に入ると、無縁塔があります。75年前の昭和25年、戦災復興計画で青森市内の身元不明の方のお墓726基を整理し、その遺骨を合祀した供養塔です。以降、災害などで身元不明の物故した方、身寄りのない方などが祀られ、年に一度供養されています。(今年は8月1日 11時から供養会 一般の方も参加できます)

以前はコンクリート製でしたが、痛みが激しくなり平成十年(1998年)に、元の構造を生かした上で、御影石で外側を覆う形で改修工事をしました。(当社施工)





究極の苦難、80年前の青森空襲。昭和22年（1947年）青森市初の民選市長となった横山實氏は、青森空襲で家族全員を失いながら、戦災復興に尽力されました。今の国道の市内中心部が両側で6車線という、当時としては並外れた広さにしたのも横山市長の決断と言われます。

歴史は、勝ったものが作る、勝者が自分に都合よく記録を残すと言われます。それでも真実は、名もない多数の人たちが、敗戦後の青森を支え、育ててきました。この無縁塔もたまたま不遇な最期を遂げた方々の大切な人生を偲び供養する場となっています。

究極の苦難、焼け野原となり、家族を失い、食えること、生きること全力を注ぎ、その中から、復興の意志を持ち続け今の青森をつくった先人の方々。それを思うと、今の私たちの悩み、仕事で成果が出ない、人間関係が辛い、体調が悪い、経営が厳しいなど苦難なんていえないのかな、なんて思います。

人は辛いことを過ぎてしまえば、割と早く忘れてしまいます。忘れないための知恵の一つが、お墓や供養塔です。お墓や供養塔へのお詣りは、自分を振り返り、生きる力を育てる習慣づくりです。形から入って心を磨く。具体的でわかりやすい方法の一つです。

油断しやすい人間心理をいかに克服するかが、昔も今も私たちの課題です。
(番地常夫)

心やすらぐ祈りの場